

## 学士号をもつ看護学生が看護教育機関を選択した要因

奥 裕美<sup>1)</sup>

### 抄 録

**目的：**看護学以外の学問を専攻して大学を卒業し、就業経験を経るなどした後に看護に転向する社会人の数が増加傾向にある。そこで、彼らが看護職になることを決め教育機関を選択するプロセスと、他分野での学問的基盤を看護にどのように活用できると考えているかという点について、彼らの教育機関での体験を通して語られる内容から分析することを目的として本研究を行った。

**方法：**看護学以外の分野で学士号をもち、看護基礎教育機関で学んでいる学生10名とのインタビューと、彼らの通う教育機関に関する資料から得られたデータをもとにした。

**結果：**学士号を持つ看護学生が看護学を学ぶことになったきっかけは【就職難】や【キャリアの模索】を体験したことであった。キャリアに悩んだ末に看護を選択したのは【看護への関心】があったからであった。その関心と、自らが仕事に求めるものが合致すると【看護への志向】へとつながっていた。看護基礎教育機関の選定にあたって影響が大きかったのは、【情報】、【生活の維持】であり、そのほか【学習環境・学習内容】、【年齢】、【偏差値】も関係していた。大学で学んだ学問と看護学との関連については、異分野であり【遠回りという認識】を持っていた。そして異分野である看護は全く初めて学ぶ学問であり、ここでは【大卒であることを強調しない】という認識につながっていた。さらに、大学で学んできたことよりも、【社会人経験の重視】をする姿勢があった。

**考察：**景気の低迷時には看護職の人気が出るといわれているが、本研究でも関連する要因が明らかになった。また、教育機関選定には個人の情報収集能力が関係していた。過去に学んだ学問が看護学に活かされると認識しているものは少なかった。多様な知識基盤を持った学生の参入は看護職の量的・質的な確保に寄与する可能性があり、過去の学習経験を生かした看護教育のあり方を検討する必要があると考える。

**キーワード：**看護以外の学士号をもつ看護学生、ダイバシティ・マネジメント、看護基礎教育

### I. はじめに

保健医療職の確保は国家的な課題となり、看護職にも将来の需要が供給を上回ることが予測されている（厚生労働省、2010）。そこで、潜在看護師の再就職支援に加え、将来看護職を選択する人材を確保するための施策を積極的に検討する必要がある。看護職となるためには看護師、准看護師教育機関に入学する必要があるが、両者は受験資格や教育内容、取得を目標とする資格も異なっている。しかし、准看護師養成所の卒業生の約40%は卒業直後に看護師免許取得のために進学しており（日本医師

会、2010）、一部の学生にとって准看護師養成所に通うことが、看護師となるための進路となっている。そして近年、他の学問を大学で学んだ後に、看護職養成機関に入学してくる、学士号をもつ看護学生の数が増加傾向にある。

米国ではこうした学生を対象とした専用の看護師養成コースがあり、経済不況を一因として入学希望者が増加している（AACN、2011）。彼らは学問的向上心が高く成績もよく、看護に貢献する存在であるといわれている（Bentley、2006；Korvick、2008；Oermann、2010）。また、看護以外の知的基盤を持つ人材が看護職となるこ

受付日：2012年2月28日 受理日：2012年6月15日

1) 聖路加看護大学大学院博士後期課程

とは、様々な背景と価値観を持つ人々の特徴を最大限に引き出すことによって組織が発展するというダイバシティ・マネジメントの視点からも有効である（谷口, 2005）。さらに、知的な準備状況がある彼らの教育においては、知的基盤の存在を理解し、知的基盤があるという強みを生かすように方法を工夫することが必要であるといわれている（Domrose, 2001；Utleigh-Smithら, 2007）。こうした点から、我が国においても学士号を持つ看護学生は、看護職の量的および質的な確保に寄与する存在となる可能性がある。しかし、学士号を持つ学生がどうして看護を選択するに至ったのか、前に学んだ学問を活かすことができているかという点については、これまで十分に検討されてきていない。

そこで、看護学以外の学士号を持つ者が看護職になることを決め教育機関を選択するプロセスと、他分野での学問的基盤の看護への活用に関して、現状を記述することを目的として本研究を行った。

## II. 用語の定義

本研究において「学士号を持つ看護学生」とは、「看護学以外の分野で学士号を取得したあと、看護基礎教育機関に入学し、看護学を学ぶもの」とした。また、「看護基礎教育機関」は、保健師助産師看護師学校養成所指定規則第1条による大学、看護師養成所、准看護師養成所のうち、大学、3年課程の看護師養成所、2年課程の准看護師養成所とする。なお看護系短大については縮小傾向であり、学校・学生数が少ないことから、本研究の対象から除いた。

## III. 研究方法

看護基礎教育機関に在学中の学士号を持つ看護学生に、教育機関の教員（仲介者）を通して研究概要説明書および依頼書を渡し、承諾を得られた10名に約1時間の半構造化面接を行った。また、彼らの通う教育機関に関する資料も参考として、データを補完した。対象者を在学中の学生としたのは、時間経過による記憶の変化を最小限に抑え、内的妥当性を確保するためである。また、質的研究の研究対象者数を決定するためのガイドラインは存在しないといわれているが（Patton, 1990）、等質な研究対象の場合には6～8人、異質な研究対象では12～20人が必要と言われていることが多い（Kuzel, 1999）。本研究の対象者は、学士号をもつ看護学生という一定の質を持つが、異なる教育機関に通うという異質な面も持っている。そこで、中間的な人数である10名を研究の対象とした。

面接時に使用したインタビューガイドは、関連する分野における文献、および学士号を持つ看護学生であった

看護師の意見を取り入れて作成した。看護学を学ぶに至ったプロセスについては、看護を学ぶこと、現在の教育機関を選択するに至った理由や思いの変化に注目した。変化があった場合にはそのきっかけとなる事項に注目した。次に大学を卒業してから看護学を学ぶという体験について語ってもらい、以前に学んだことがどのように役立つと感じるかについて語られた内容に注目した。面接で語られた内容は、同意を得て録音し逐語録に起こした。逐語録を繰り返し読み、注目した内容に関する語りを抽出した。抽出したデータは内容の類似性・相違性に基つきカテゴリ化を行った。データ分類と解釈のプロセスは研究指導者のスーパーバイズをうけ妥当性を高めた。

表1 研究対象者の概要 N = 10

		人数	
性別	女性	9	
	男性	1	
年齢	20代	3	
	30代	6	
	40代	0	
	50代	1	
在学している教育機関	看護系大学	4	
	看護師養成所（3年課程）	3	
	准看護師養成所（2年課程）	3	
社会人経験の有無	あり	8	
	なし	2	
学位を取った学問領域	環境	2	
	外国語	2	
	社会福祉	1	
	国際関係	1	
	教養	1	
	情報	1	
	経済	1	
	経営	1	
	社会人経験ありの場合の職業傾域（複数回答）	介護（介護福祉士、ヘルパー）	2
		教育（教員）	2
販売、営業		2	
一般職、事務		2	
主婦		2	
看護助手		1	
	システムエンジニア	1	

#### IV. データ収集期間

2011年9月～12月

#### V. 倫理的配慮

仲介者、研究対象者には個人が特定されるような形で回答を公にしないこと、研究目的以外には使用しないことを書面にて伝えた。また、仲介者から紹介された研究対象者が研究に協力するかどうかは、対象者の自由意思に基づくものであること、研究協力の諾否を仲介者に通知することはないことを依頼書に記載し保証した。面接時に改めて本研究の目的・研究方法について口頭で説明し、承諾書への署名を得た。本研究は、聖路加看護大学研究倫理審査委員会の承認を受けた(承認番号11-025)。

#### VI. 結果

##### 1. 研究対象者の概要

研究対象者の属性について表1にまとめた。10名のうち女性が9名、男性は1名であった。年齢は30代が6名と最も多く、次に20代が3名であった。在学している看護基礎教育機関は、大学が4名、看護師養成所(3年課程)が3名、准看護師養成所(2年課程)が3名であった。

#### 2. 看護職を目指した経緯

研究対象者が看護職を目指し看護基礎教育機関に進学しようと思った経緯は図1のようにまとめられた。カテゴリは【 】, サブカテゴリは< >, 研究対象者の語りは「 」で示した。語られた主な内容と分析結果は表2にまとめた。

彼らが看護基礎教育機関に進学したきっかけは、大学時代に【就職難】を経験したことや、就業してから【キャリアの模索】をしたことにあった。<昔からの看護への関心>があったA, Iは専攻していた学問に関連する分野で思うような就職先が見つからず、卒業後すぐに看護職を目指した。またF, G, Jは就職のため在学中にヘルパー等の資格を取得し、看護以外の医療関係職や介護職となった経験を持つ。彼らを含め、研究対象者は就職して暫く後、<職業の将来性に不安を感じる>, <直接人の役に立つ仕事がしたい>, <収入を増やしたい>という理由から、その先の【キャリアの模索】をしていた。

そして将来のキャリアに悩んだ末に看護を選択するきっかけとなっていたのは【看護への関心】であった。これはCのように<昔からの看護への関心>があったが大学や一度目の就職は別の領域に進んだというものや、就職先で<看護(師)に接した経験>, <身近な人の闘病体験(死)>があったことによって培われていた。こうして自らの関心と仕事に求めるものが看護と合致し

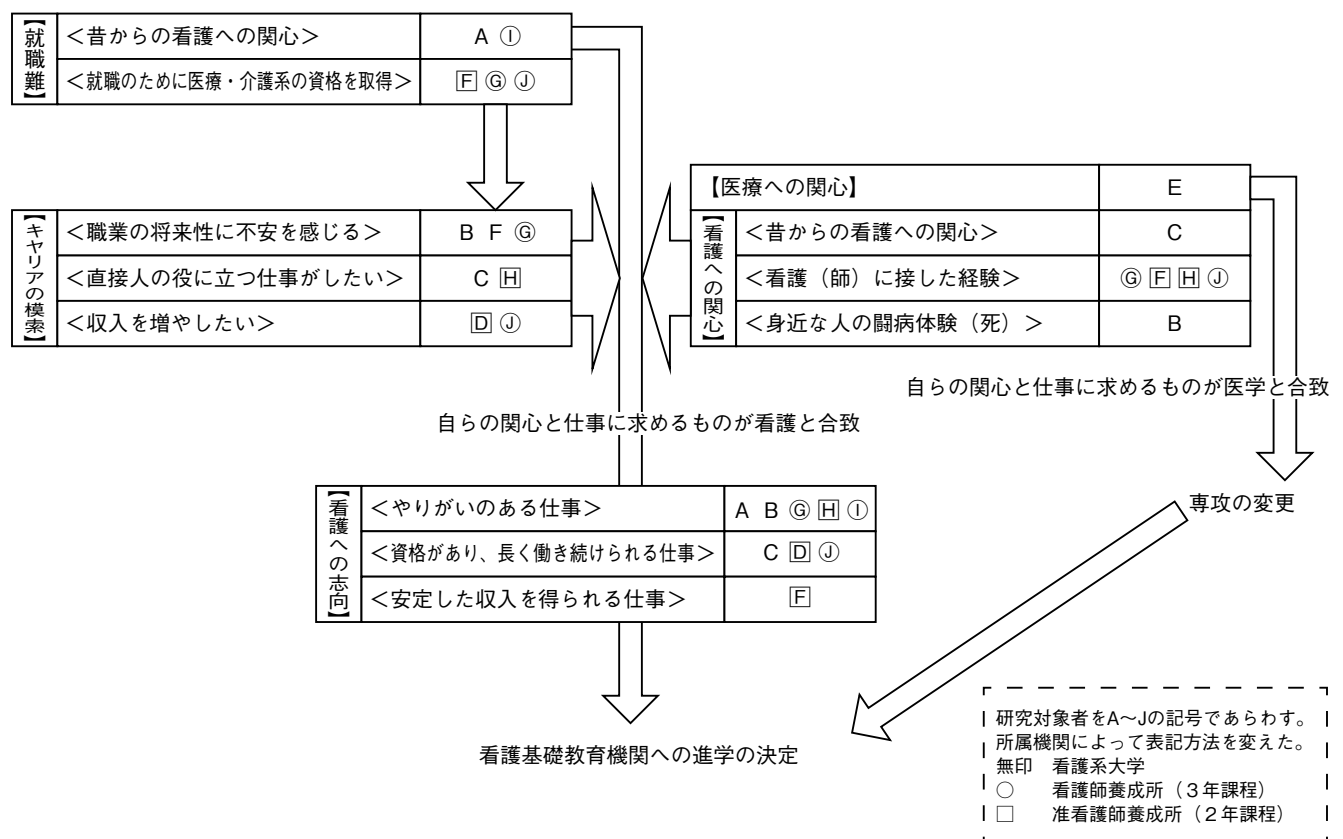


図1 研究対象者が看護職を目指した経緯

表2 看護職を目指した経緯

【カテゴリ】	＜サブカテゴリ＞	「根拠となる語り」の例
就職難	昔からの看護への関心	「高校生の時に英語と看護で一度迷って (A)」 「小っちゃいころからなんとなく (看護師になりたい) 思ってきた (I)」
	就職のために医療・介護系の資格を取得	「(大学に) 通いながらホームヘルパーの養成機関に行って資格とる (F)」 「研究職とかになりたかったんですけど、そういう就職先もなかった (ため介護の資格を取った) のも現実です (G)」 「(求職中に) 学校に半年行けば (資格が) とれるよって聞いたので、そこに行って (J)」
	キャリアの模索	「(非常勤職員だったので) 採用試験を受けていたりはしてはいたんですけど (仕事が) 縮小していつているので (B)」 「3年働いた時点でほかの進路を目指すかって思った (F)」 「(前の職業) だと限界があるっていうのは感じて (G)」 「事務職でずっとなんかそのいるの、将来的にちょっと心配を感じたんです (H)」
看護への関心	直接人の役に立つ仕事をしたい	「(前の仕事は) 機械を通して誰かの役には立っているかもしれないけど、もっと直接的に誰かの役に立ちたいな、と思って (C)」 「毎回笑って座ってね、お金もらってるけど、もう少し必死に働いたり、人のために働いたりしたいなって思っちゃって (H)」
	収入を増やしたい	「子供もいるので (中略)、秘書とか簿記とかも考えましたけど (中略)、なかなか就職が難しいって思いました (D)」 「自立して、給料も上がって (中略) となるともう看護師しかないなって (J)」
	昔からの看護への関心	「元々はやりたいことが (看護と○系の) 2つあって、で、大学の時は看護ではなくて○系を選んで (C)」 「(看護もいいなと思っていて) やっぱ今アルバイトで看護助手やってるんです (D)」
医療への関心	看護(師)に接した経験	「今の職場の先輩 (看護師) みたいになりたいって (F)」 「(前の職場で看護師) を見てたら、看護師さんいいなって思って (F)」 「(前の職場で自分たちは利用者の) 訴えを聞くだけだったんですけど、看護師はそのあとのことができるっていうか (G)」 「(夜間外来に行ったときに) すごいなんか必死で人を助けてる姿とかを見ちゃって、私こういうところで働きたいなって (H)」 「看護師さんとかは飛んできて、患者さん運んだりトランスしたりしているのを見て、あ、かっこいいなって (J)」
	身近な人の闘病体験 (死)	「身近な人が亡くなるという経験が続いて (中略) もっと医療的な知識があった場合にこう、残された人たちへのケアだったり、何かできたんじゃないかなって思って (B)」
	医療への関心	「看護って言うよりも医療をやりたいかったです (E)」
看護への志向	やりがいのある仕事	「働くんだったら人の役に立てる仕事したいと (A)」 「亡くなった後とかに、看護師から本人が言えなかったことを家族にお伝えして、それでふっと (家族の) 心が軽くなったりとか、そういう体験をするって聞いたことがあって、それがすごいなって思った (B)」 「施設を運営していくにあたって『看護師がいなきゃ』っていうイメージがあったんですけど (中略)、こういう風になりたいなって思っていました (G)」 「社会に出て仕事をしたいっていう気持ちはずっとありました、で (友人の母 (看護師) に命を救われたと) 感じたことがあります、その時はやっぱり看護でって (I)」 「(前職が) 結構やりがいとかなくて (H)」
	資格があり長く働き続けられる仕事	「この先仕事を続けることとかを考えると、保健師にと (C)」 「長く働ける仕事で (中略)、あと資格を取りたいって考えた時に (D)」 「資格あるっていうのがすごく強くて (中略)、長期間 (就業期間が) 空いてもまた仕事ができるっていうのは、資格が強かって (J)」
	安定した収入を得られる仕事	「(給料が) ○○ (前職) に比べたら全然高いじゃないですか (F)」

て、【看護への志向】へと繋がっていた。これは<やりがいのある仕事>、<資格があり長く働き続けられる仕事>、<安定した収入を得られる仕事>といった特徴から成り立っていた。

ただしEは「やりたいことは看護に近い (が)、より自律性があるのは医師 (E)」と考え、医学部医学科を目指していたところ、同時に受験していた看護学科に合格したことから、看護を学ぶこととなった。

### 3. 看護基礎教育機関の選択に影響する要因

看護を学ぶことを決めた研究対象者が、どの教育機関に通うかを決定するのに影響した要因は、大きく【情報】、【生活の維持】の2つに分類された。さらに【学習環境・学習内容】、【年齢】、【偏差値】という意見もあった (表3)。

#### 1) 【情報】

【情報】の源として挙げられたものは<医療関係者の

表3 看護基礎教育機関の選択に影響する要因

【カテゴリ】	<サブカテゴリ>	「根拠となる語り」の例 (本文中に記載した語りは表中から除いた)
情報	医療関係者の意見	「入学しようと思ったのは一番最初は自分なんですけど、そのあとに大学なのか、看護学校なのか選ぶときには(看護師の友達に)相談しました(C)」 「(看護師の友人から)看護があまり体系的ではないっていう風に聞いていたんですけど、看護学校よりは大学のほうが少しでも体系的に学べるのかなって(C)」 「周りの人(医療者)もすごい看護師をすすめてくれて(中略)今の職場で看護学校に通わせてくれるっていう話があったので(F)」 「今の(職場の)院長先生が(から)、働きながらでも行ける感じのがあって、しかも2年くらいでとりあえず准看の資格とれるシステムみたいなあるんだよ、みたいなのを聞いて(H)」
	ガイドブック	「本ですね、専門学校とかのいっぱい載ってるやつ(G)」 「本っていうか、ガイドみたいな、そういうので調べました。あとは学校に行ってみたり、資料取り寄せてみたり(I)」 「市販されている(本やガイド)(J)」
	インターネット	「(学校は)ネットで探しました(C)」 「インターネットですね。本はもう准看に関するものとかほとんどないですよ(D)」 「1校聞いたっていうか、ネットでしか見てないですけど(中略)あとでも調べたり、(学校から)資料取り寄せたりしたけど(H)」
	予備校	「(予備校の)先生から情報もらったり、学生と情報交換したりとかってのはありました。あそこには既卒者が多いらしいよ、とか(大学で取得した単位を)免除してもらえらしいよ、とかそういう。パンフレットに学士編入制度があるって書いてあっても、(学士学生が)何人いるとかまではわからないので(A)」
生活の維持	場所	「近いので、そこに行きたいなと思っていて(B)」 「(学費は)安いほうが良いと思ったんですけど(中略)、通えるってことで(C)」 「実習とか始まって朝早くなることとかを考えると、やっぱりあんまりに遠いとちょっと、子供がいるのでできないなと思うんです、時間が(D)」 「〇〇(地域)だったら、〇〇大がいいかなって思って(E)」 「実家に一度戻ることにして、今、実家から通ってるんです(F)」 「通えるところで〇〇(地域)くらいまで、探しました(F)」 「家から近いところっていうのにはこだわった(I)」 「家から通えるってのがこの学校(J)」
	資金	「お金のことはやっぱりあって(中略)両親に相談したら、やりたいことは応援するから、ということで甘えてしまいました、出世払いで(A)」 「正直学費が安かったので(中略)親にも迷惑かけられないと思って貯めていた時に、ちょうどまあだいたい大学に行かれるくらいのプラスちょっと(貯蓄がある)っていうタイミングだったんです(B)」 「(学費は)奨学金とかがあるので、大分安くはなるんですけど、半分くらいには(中略)助成金みたいなのももらって、それはもう返さなくてもいい、何も条件もないものなんです(D)」 「(学校選びの決め手は)学費です(中略)親にも迷惑をかけちゃったんで(G)」 「(貯金があるから)2年間はとりあえず頑張ってるんですけど(かかるお金は)2年も3年もそんなに変わらない(H)」
学習環境・学習内容	カリキュラム	「(EBNを謳っているという教育方針があり)入る前から(中略)気になっていた(C)」
	教育環境	「設備も整っているし、ちゃんと看護を学ぶっていう環境が整っていると思うよと言われて(B)」
年齢	早期就業の希望	「年齢的に少しでも早く。(大学で)4年かかるよりは3年でって思った(G)」 「早く卒業して、それでお金を稼がなきゃみたいな感じでした(J)」
	同級生との年齢差の意識	「本当だったら3年制(の教育機関)に行きたかったんですけど、でもたとえばクラス40人いる中の35人が18歳で、その中に一人自分がいくっていうのはやっぱりちょっと気が引けたんですよ(H)」
偏差値		「(偏差値が)低いところ、低めのところ(中略)もうどっかに入りたかったんです(J)」

意見>、<ガイドブック>、<インターネット>、<予備校>であった。

<医療関係者の意見>は、最も多くの研究対象者が指摘した情報源であった。そして「専門学校に行こうかと思っていたんですけど、両親(医療者)に相談したら(中略)、4年制大学に行ったほうが、あとあとの長い目で考えた時にはいいよ、と言ってもらえたので(大学へ進学した)(A)」、「最短で(看護師免許を)取りたいと思っ

て(中略)、専門学校受けようと思って。そんなこと言ってたらちょうど同僚(看護師)がX県ならY大学があるよって教えてくれて、あそこの学校よかったよって(中略)、それなら受けてみようって(B)」、「准看(学校)って手もあるかなと思っていたんですけど、(知人の看護師から)行くんだったら専門学校3年間行きなさいって言われたのが(心に)刺さっていて(I)」のように、彼らの発言は影響力を持っており、時には進学先の

希望の転換につながることもあった。また、「(アルバイト先の) クリニックで准看学校とかあるよって言われて。私、准看っていうのもその時初めて知って。看護師さんって看護師さんしか知らなかったから、そんなとき始めて准看とか、正看があるって知ったんですよ (H)」のように、それまで認識もしていなかった准看護師に興味を持ち、准看護師養成所に通うことになったものもあった。

学校情報を集めた<ガイドブック>や<インターネット>を利用するものもあった。これらは教育機関の所在地、学費、入試情報などについてはじめに調べる道具となっており、そこで気になった学校には直接資料を請求したり、見学に行ったりしていた。さらに「ネットでしか見てないですけど、そこ(看護基礎教育機関)はやっぱり(学生の中心が)18, 19(歳)とかで、(社会人の学生は)いても、20(歳)代が2, 3人とか言ってた(H)」というように、<インターネット>では実際に教育機関に通う個人のブログやホームページを参照することができる場合があり、それを読んで学校生活の実態を想像しているものもあった。しかし<インターネット>にはそのような個人からの情報も含めたあらゆる情報が溢れているため、「何回も何回も調べて、いろんなサイトがあって、もう閉校になっているところもすごく多くて、それも全部一つひとつ書き出して、学費とか場所とか、そういうのも調べて、いくつかのサイト見て、閉校されているところは消して、ってやってたので大変でした(D)」と言うように、正確な情報を集めるには、手間がかかったと述べたものもあった。

<予備校>を情報源としていたものは1名だけであったが、一般向けに作られた資料からだけではわからない情報が、得られることがあったという。

## 2) 【生活の維持】

【生活の維持】には教育機関のある<場所>、<資金>という要素が含まれていた。「近いのと、正直学費が安かったの。(B)」というように家賃のかからない実家や、現在の生活拠点からの通学が可能であることが選択基準とされていた。また、「学費(が安い)。あともう4年間通うっていうのはやっぱり厳しいので3年制(の看護基礎教育機関)に通うことにした。早く卒業してお金稼がなきゃ、って感じで(J)」、「2年だったら全然お金もそんなに働かなくてもやってけるし(H)」というように、自らの経済力や貯蓄で学生生活を維持することができる年数を計算し、それに応じた就学期間である教育機関を選択していた。ただしHは同時に、教育機関の設立主体によって学費が大きく異なることや、奨学金などの制度について「知ってたら、(それでも賄えたため)大学も考えた(H)」とも語った。また、現在は准看護師養成所2年課程に在籍しているが、卒業後は進学コース(定時制3年課程)に進むため、5年間で看護師になろうと入学前から決めていたDが「働きながら

(学校に)通えるというのがすごく大事で、少し時間はかかってしまうんですけど(入学前に)貯金を、生活費から何から貯めておくっていうのは割と大変で。何百万とかになっちゃうから(D)」というように、修業年数の長さよりも、就業を継続しながら学べることを優先するものもあった。

## 3) 【学習環境・学習内容】、【年齢】、【偏差値】

看護基礎教育機関選択に影響する要因としてそのほかにも、「今の学校が語学に力を入れている学校で、それを知って興味を持って(A)」、「うちの大学だとほかにも(学部)があるんで、連携した形で学べる(C)」という<カリキュラム>や、「設備が整っている(A)」、「やっぱり(施設が)きれいだから(H)」という<教育環境>が含まれる【学習環境・学習内容】や【年齢】、【偏差値】という意見も述べられた。【年齢】は、少しでも早く看護職となって社会に出たいという<早期就業の希望>を持つものと、自分の年齢そのものよりも<同級生との年齢差の意識>をするものがあった。また1名のみであるが【偏差値】に合った学校を選ぶということもあげたものもあった。

## 4. 学問的基盤の看護への活用

研究対象者が、以前に学んだことがどのように役立つと感じているかについて注目したが、彼らは大学で修めた学問的基盤を活用するという前に、看護とは異分野の学問を学び時間を費やしたことについて【遠回りという認識】を持っていた。そして看護は他の学生と同じく初めて学ぶ学問であるため、【大卒であることを強調しない】という認識につながっていた。さらに、大学で学んできたことよりも、【社会人経験の重視】をする、という3つのカテゴリに分類された。

### 1) 【遠回りという認識】と【大卒であることを強調しない】こと

彼らは過去に別の学問を学んだことについて「無駄に(前の)大学行っちゃった(H)」、「遠回りしちゃった(J)」と、【遠回りという認識】を持っていた。そして「経済とかで経営戦略とか(大学で)、やってきたけど、医療の世界では役に立たないですか(H)」、「全然関係ないじゃないですか、自然環境と看護って(G)」さらに、「(経営と)看護が全く分野が違うので(J)」というように、過去に学んだことと看護とは関係がない、前に学んだことは役に立たないと述べていた。ただしBは「学んできたこと(社会福祉)は絶対に持って看護師になりたかった(B)」と述べ、入学時から以前修めた社会福祉と看護との関係を意識していた。しかし教員から「それ(大学で学んできたことに基づくBの考え)はいらないでしょって言われた(B)」経験があり、Bの福祉と看護を両方活かしたいという考えを変えようとしているように感じ、「納得がいかなかった(B)」と述べていた。また「(一度大学を出ていることで)期待さ

れる度合いが高くなっちゃうのかなって。変に期待値あげたくないなって (A)」、や「いろいろ経験を積んだことが本当はプラスなんですけど、でも1年生だったら同じ1年生っていう土台で、そこはプラス抜きで一緒にやりたいって。(C)」というようにあえて【大卒であることを強調しない】傾向もあった。

## 2) 【社会人経験の重視】

そして「(大学を出たことよりも) 仕事をしてきたということが (中略) 何かしら蓄積されているのかな。(C)」というように、大学を卒業したことよりも、就業経験があることが看護に活用されると指摘するものもあった。なお、介護職の経験がある場合「介護とかもしてて、ある程度自分じゃわかってるところもあると思ってたんですけど、全然知らないところがいっぱいあって (F)」、「実技のときとかはやっぱ介護してたんで、自分のやり方がもう身についてたんで、なんでこれじゃいけないの、みたいなことを先生に言ったりして、先生も苦い顔してたりしました。(G)」というように、大学で学んだことよりも介護をしていた経験が、教員から指摘されることを含めて、看護を学ぶ上で影響すると述べていた。

## V. 考察

### 1. 学士号を持つ成人が看護を選択する理由

学士号を持つ看護学生に限らず、景気低迷期には看護のように安定した雇用のある職業の人気が出るということが報告されている (Fegin ら, 2008; Buerhaus ら, 2009)。本研究においても研究対象者が看護職を目指した大きな理由に【就職難】と【キャリアの模索】といった、景気の低迷による就職難や就業継続への不安と関連する項目があげられており、現在のような社会経済の状況が続けば、今後もこうした学生が看護職を希望することは増えることが予想される。

また、教育機関の選択にも【生活の維持】という経済的な要因が大きく関わっていた。中西が、学士号を持って看護基礎教育課程に進学を希望するものが進学先を決定する際には、学修年限と入学者選抜方法、学費が決め手になっていると指摘する通り、本研究においても修学期間とその間にかかる費用は重要なポイントとなっていた (中西, 2000)。ただし、修学期間は短く、学費は少ない方がよいという単純な図式ではなく、自らの経済状況と学習に費やすことのできる期間とのバランスを考慮して決定されていた。機関や居住地域によって様々な奨学金や給付金の制度があるため、単純に比較することは難しいが、准看護師養成所の学費が年単位で考えると大学と同程度になるというケースもあり、本研究においても受験前に詳細な情報を持っていれば別の教育機関に行くことを望んだという対象者もあった。また、准看護師

教育機関に通っているものの中には、入学前から卒業後はすぐに定時制の進学コースに通い、5年間で看護師になると計画しているものもあった。期間は長くかかって就業を継続することが重視された結果であったと考える。なお、進学先を選択する際の情報源として最も影響力があったのは「医療関係者の意見」であり、それによって進学先が変わるほど、信頼度の高いものとしてとらえられていた。医療関係者がアドバイスを行う場合、相談された個人が持つ看護基礎教育、看護職のキャリア構築に対する認識が、相談者の将来に大きく影響することが考えられるため、影響力の大きさを認識し、正確な情報を持って回答することが望まれる。

また「ガイドブック」や「インターネット」については、それだけで情報が充足される道具ではないということが指摘されていた。特にインターネットを使用した場合、情報が集約された信頼できる情報源には到達しにくいようであった。研究対象者は高校から直接進学するものと異なり、進学に関して専門的な支援ができるリソースを持たないほか、情報交換ができる友人も身近にいないため、自分にとって有用な情報をどれだけ収集できるかということが、個人の状況や情報収集能力によって大きく左右されてしまう。

こうした現状を踏まえ、将来を担う人材を受け入れるための重要な手段として、看護教育機関に関する情報提供のあり方を検討していく必要がある。看護職の確保が国家的課題であることを考えると、これは職能団体や、看護教育に関連する全国的な団体などが協力して行うことが望ましく、進学情報に関する支援体制をもたない、年齢が高い、様々な経験をしているといった多様な人材が情報を求めているという点も反映したものにするるとよいと考える。なお、その際には本研究の対象者のように実際に情報を求めている者の意見を取り入れることも有効である。

### 2. 学士号を持つ看護学生の持つ能力を活かした看護学基礎教育とキャリア支援の必要性

研究対象者の多くが、過去に学んだことを看護に活かすということを意識したことがなく、あえてそれはなかったこととして看護を学んでいた。分野が近い福祉を学んだものだけが、それを踏まえて看護を学んでいると意識していたが、多くは【遠回りという認識】を持っていた。研究対象者の学問的背景を見てみると (表1)、たしかに経済、経営、外国語や環境学よりも社会福祉の距離感は看護に近いと感じられる。また、研究対象者は看護の初学者であり、これまでの経験から想起される看護が、ベッドサイドで行われる患者との直接的な関わり場面が中心であることが考えられ、経済や経営、環境などの知識が看護でも活用されるということまでは、考えられなかったのかもしれない。しかし、実際には看護職にも経営的な知識が必要であり、管理者となれば必須

である。公衆衛生やグローバルヘルスの分野では、地球環境についての知識を活かすことができる。語学も直接その言語を話す患者と触れ合う機会がなければ役に立たないわけではなく、他国語で書かれた論文を読んで臨床実践や研究に活かすことができる。

今日看護職が活躍する場はいわゆるベッドサイドだけではなく、教育や研究、政策提言など、多分野にわたるスペシャリストの存在が求められている。ほかの領域の学士号を持ちながら第2のキャリアとして看護学を専攻する人たちは、そうした豊かで幅広い知識を看護の世界にもたらしており、参入の促進が期待されている (Petrini, 2000)。ダイバシティ・マネジメントの視点からみても、学士号を持つ看護学生の個性の一つである学問的基盤の多様性を活かすことは、看護の発展に寄与することにもつながる。ただし、その多様性を意味のあるものとするためには、所属する組織や組織を構成する人々がその意義を共有し、それが活かされるような教育をすることが必要である (谷口, 2005)。そこで看護の初学者である学生に、「遠回り」の貴重な意味を伝えるとともに、過去の学習経験を活かしたキャリア構築を示唆することができるような看護基礎教育のあり方を検討することが必要である。また本研究の結果に、対象者が所属する教育機関による明らかな違いはみられず、教育機関選択についても、情報があれば准看護師養成所を選択しなかったかもしれないという内容や、あくまでも看護師になるために准看護師養成所に入学したという内容の発言もあった。高校進学率が98%を超える我が国において、准看護師養成所の入学要件は中学校卒業であり、そこに入学する大卒者の教育や、その後のキャリア支援は、特に注目すべき課題である。

## VI. 本研究の限界と今後の課題

本研究の結果は仲介者を通して便宜的に抽出した学士号をもつ看護学生のインタビューから得られたものであり、データに偏りがある可能性がある。また、多くの研究対象者が看護学を学ぶ過程において過去に学んだ学問が活かされていると認識していなかったが、彼らが学んできた学問の分野や、受けている教育、年齢や性別との関係にも注目した分析を行うことが、今後の課題である。

## VII. 結論

学士号をもつ看護学生が看護学を学ぶきっかけは、【就職難】や【キャリアの模索】を体験したことであった。看護基礎教育機関の選定には、【情報】、【生活の維持】が大きく関わっていた。大学で学んだことと看護の関係については多くは語られず、【遠回りという認識】を持っていた。また、あえて【大卒であることを強調しない】や、大学で学んだことよりも【社会人経験の重視】をす

る姿勢があった。今後もこうした学生が看護職を目指すことが増えると予想されるため、受け入れる側の体制整備が求められている。

## 謝辞

本研究にご協力いただいた研究対象者、仲介者の皆様に深く感謝いたします。

## 引用文献

- AACN (2011). *Accelerated Baccalaureate and Master's Degrees in Nursing*. American Association of College of Nursing. <http://www.aacn.nche.edu/media-relations/accelprogsglance.pdf>. (2012. 3. 13).
- Bentley, R. (2006). Comparison of Traditional and Accelerated Baccalaureate Nursing Graduates. *Nurse Educator*. 31(2). 79-83.
- Buerhaus, P. I., Auerbach, D. I., Staiger, D. O. (2009). The Recent Surge in Nurse Employment: Causes and Implications. *Health Affairs*. 28(4). 657-668.
- Domrose, C. (2001). The RN Route, Nurse Week. com, December 6, Nurse Week Publishing. [http://www.nurseweek.com/news/features/01-12/rnroute\\_print.html](http://www.nurseweek.com/news/features/01-12/rnroute_print.html) [2012. 12. 02].
- Fegin, C., Summers, S., Summers, H. (2008). 看護師不足—世界規模の看護師不足. Aiken, L., Benner, P., Watson, J., et al., 和泉成子監訳. *看護の危機 人間を守るための戦略*. (64). 東京: ライフサポート社.
- Korvick, L. M., Wisener, L. K., Loftis, L. A., et al. (2008). Comparing the Academic Performance of Students in Traditional and Second Degree Baccalaureate Programs. *Journal of Nursing Education*. 47(3). 139-141.
- 厚生労働省第七次看護職員需給見通しに関する検討会 (2010). *第七次看護職員需給見通しに関する検討会報告書*.
- Kuzel, A. J. (1999) Sampling in Qualitative Inquiry. Crabtree, B. F., Miller, W. L., *Doing Qualitative Research* (2nd). (33-45). California: Sage.
- 中西睦子 (2000). 優秀な人材を惹きつけるために. *Quality Nursing*. 6(7). 4-10.
- 日本医師会 (2010). *平成22年医師会立助産師・看護師・准看護師学校養成所入学・卒業状況調査*. 日本医師会.
- 日本看護協会 (2011). *平成22年看護統計資料集*. 東京: 日本看護協会出版会.
- Oermann, M. H., Poole-Dawkins, K., Alvarez, M. T., et al. (2010). Managers' Perspectives of New Graduates of Accelerated Nursing Programs. *Journal of Continuing Education in Nursing*. 41(9). 394-399.



- Patton, M. (1990). *Qualitative Evaluation and Research Methods* (2nd). California : Sage.
- Petrini, M. A. (2000). アメリカにおける看護学以外の学士号取得者向けの集中型看護教育プログラム—学部教育レベル. *Quality Nursing*. 6(7). 11-27.
- 谷口真美 (2005). *ダイバシティ・マネジメント多様性を生かす組織*. (199-281). 東京 : 白桃書房.
- Utley-Smith, Q., Phillips, B., Turner, K. (2007). Avoiding Socialization Pitfalls in Accelerated Second-Degree Nursing Education: The Returning-to-School Syndrome Model. *Journal of Nursing Education*. 46(9). 423-426.

## Factors for Choosing Nursing by Students with Bachelor's Degrees in Other Fields

Hiromi Oku<sup>1)</sup>

1) St. Luke's College of Nursing Doctoral Course

**Purpose** : The numbers of individuals, with bachelor's degrees in nonnursing fields, entering nursing is increasing. The purpose of this study is to describe their process of 1) making decision to become nurses, 2) selecting which nursing school or college to enter and 3) how do they link the knowledge of their previous discipline to nursing.

**Method** : Data were collected by interviewing 10 nursing students who had graduated from universities with nonnursing majors prior to entering nursing educational institution. Data about nursing educational institution were also collected, in order to complement the interview data.

**Results** : Participants were motivated to become nurses when they experienced [difficulty finding employment] or [groping for their career]. They chose nursing as their second career because they had [interest in nursing], and when this interest and their demand for occupation were matched, it was changed to [intention to nursing]. The main motivation for selecting came from [information]and [maintain living] and [environment / curriculum of schools], [age]and [academic grades]were also related.

Only a few expressed the relationship between previous academic knowledge and nursing. They described that nursing is in different field and so they [made a detour]. Moreover, recognition of nursing as a different discipline led them to think [minimize past experience]. Furthermore, they put [ more value on job/working experience] than what had learned at the university .

**Conclusion** : The numbers of students who select nursing as their second career are projected to increase when business conditions are declining like it is today, and the factors related to this became clear. Ability to collect information was related to select educational facility. Entry of students with various knowledge bases may contribute nursing and it is important to enliven their knowledge as we think of managing diversity. Nursing institutions must be properly prepared to accept these students to build nursing knowledge on their knowledge bases.

**Keywords** : student with non-nurse bachelor degree, diversity management, nursing education